

熊本県 小国町

おぐくにまち



1. 九州ツーリズム大学のメインキャンパスとなっている「木魂館」とその後ろに見えるのが湧蓋山。「木魂館」は会議室や食堂、浴場(温泉)、宿泊施設などを完備している。
2. 「小国ドーム」の外観。屋根はステンレス張りになっていて、巨大な亀の甲羅のように見えることから、BIG TURTLE(ビッグタートル)の愛称で親しまれている。
3. 「小国ドーム」の中。杉角材5,602本を使用して建てられた、その構造を見る事ができる。
4. 平成12年に開校した「おぐくに自然学校」。九州ツーリズム大学の保育園と小学校に位置付けられ、子どもたちに小国の自然の中で様々な体験をしよう。

受け継がれる「学び」と「交流」 人づくりが町の潜在パワーを引き出す

Pick Up

熊本県阿蘇郡小国町は、雄大な阿蘇の麓にある緑豊かなまちです。特産の杉を利用した数々の建築物で脚光を浴びる中、都市と農村の交流をめざす“ツーリズム”に着目。その担い手を育てるための「九州ツーリズム大学」を開校し、地域特性を活かしながら町ぐるみの発展を続けています。今回は、九州ツーリズム大学を中心に「人材育成」と「交流」で地域づくりを進める、小国町の取り組みをご紹介します。

熊本県

九州を代表する林業のまちとして栄えた小国町

九州のほぼ中央、熊本県の最北端に位置する小国町は、筑後川の上流・阿蘇外輪山の外側に広がる緑豊かなまちです。総面積の七十四パーセントが山林で占められ、約百二十七平方キロメートルに約八千三百人が暮らしています。町内には渓谷の清流を挟んで三十軒ほどのホテル・旅館が立ち並び、杉立温泉をはじめ、小国富士と呼ばれる湧蓋山の源泉を利用した温泉が数多くあります。また小国町は、年間二千ミリを超える雨量と肥沃な土壌が杉の生育に適しており、明治以来、積極的に杉の造林が進められ、林業と製材関連産業が町の経済を支えてきました。町内には九州電力(株)の松原水力発電所(出力五万キロワット)があり、また近隣には同八丁原地熱発電所(出力十二万キロワット)があり地域に電気を供給しています。

「建築」をテーマにしたまちづくりを推進

昭和六十年、小国町の地域づくりを推進する運動「悠木の里づくり」がスタートしました。この運動は、小国町の自然を背景に培われてきた伝統や文化など地域資源を、町民の力で活かしていくとするもので、当時の宮崎暢俊町長が積極的に推進しました。まずは特産の小国杉を利用し、廃止となった旧国鉄宮原線「肥後小国駅」の跡地に、建築デザイナーを起用して「道の駅・小国ゆうステーション」を建設。杉角材を特殊な金具で接合し、三角形に組み合わせていくという木造立体トラス構法を日本で初めて採用しました。また同構法による「林業総合センター」、町民体育館「小国ドーム」も相次いでオープンしました。斬新なデザインが印象的なこれらの建築物は、日本建築学会賞を受賞して話題となり、視察団など多くの人を町に呼び寄せたのです。後に「九

お問い合わせ先：小国町役場 商工企業促進課 TEL 0967-46-2113



小国町役場 商工企業促進課 課長 江藤 訓重さん

んはその後、平成十七年まで「財団法人学びやの里」事務局長、平成十九年から同理事長を歴任され、「九州ツーリズム大学」の設立、運営に深くかかわって

いくのです。

州ツーリズム大学」のメインキャンパスとなる「木魂館」も、同時にオープンしています。こうした活動が評価され、小国町は昭和六十三年に「活力あるまちづくり自治大臣賞」を受けました。

さらに宮崎前町長は、まちづくりの新たな展開を模索するため、平成元年からシンポジウムや地区懇話会などを積極的に開催。その結果を「小国ニューシナリオ」としてまとめました。また、住民の浄財によって平成八年に「財団法人学びやの里」を設立し、

大学づくりのきっかけは九州ツーリズムシンポジウム

研修、観光、福祉、環境保全の四部門に分けて高齢化や環境問題に対処することとした。このプランニングチームに、民間から参加したのが現小国町役場商工企業促進課の江藤訓重さんです。江藤さ

小国町で内外の人の交流が進んでいく中、全国的にグリーンツーリズムが注目されるようになってきました。ツーリズムとは、訪れた地の自然環境とそこでの体験、またそこに暮らす人たちのふれあいを楽しむ新しい旅の形態です。平成八年、こ

のツーリズムを通じ農山村の自立や振興を図ることを目的として、「木魂館」において「九州ツーリズムシンポジウム」が開催されました。シンポジウム参加者の共通の悩みとして、「ツーリズムを実践していく中で人材育成や実践的なノウハウを学ぶ場が無い」ところが挙げられ、そこから「九州でツーリズムの人材育成をやろう、その拠点となる学びの場を作ろう」という声が始まりました。

地域活性の担い手を育てる「九州ツーリズム大学」を開校

半徑百キロがキャンパス ツーリズムの現場で学ぶ

「九州ツーリズム大学」は、農山村で地域に合ったツーリズムを実践していく担い手やコーディネーターでできるリーダーの育成を目的として創設されました。また同時にツーリズム関連の有益な情報を集約・活用すること、これからツーリズムを展開していく人たちの広いネットワークを作

は二泊三日で月一回のペースで計七回。ツーリズムに関心があれば誰でも受講でき、全課程を受けた人が卒業生、スポットで受けた聴講生のうち三回以上の聴講生は修了生と呼ばれます。

さらに小国町には、古くから教育に熱心な下地があった

「開校当初の受講生は、生産現場で働く方や農家の主婦の方が多かったですね。現在は九割が町外からの方です。第一期生は修了生も入れて五十数名、毎年同じくらい募集して平均の卒業生は三十人くらい。これまでに十年間で卒業生は約三百人、修了生も合

わせると約千五百人になります」と語るのには、「財団法人学びやの里」の現事務局長である小野寿宏さん。小野さんは小国町役場職員として、「九州ツーリズム大学」の立ち上げにかかわり、平成十七年から現職です。授業は「木魂館」を本館として小国町内、さらに大分県の湯布院や安心院などで行われ、半徑百キロ以内

ます」と小野さん。現在、大学には「ツーリズム学科」と「観光まちづくり学科」の二学科が設置されています。

全国そして海外からも視察団がやってくる

「面白い授業に、レストランの経営者としてメニューづくりや値段設定も体験する」一日農家レストランや、野原で実際に行ううさぎ追いや、町を歩いて集落の宝物さがしをする「集落ウォッチング」などがあります。また、湯布院のおもてなし研修では、実際に各旅館に入ってスタッフのひとりとして働いたりし

現在は順調に運営している「九州ツーリズム大学」ですが、開校時は資金集めに苦労したと、小野さんは話します。「大学開設時期の関係上、初年度は予算に組み込んでもらえず国からの助成金がもらえませんでした。県・町からのバックアップを受けて始まり、第二期から第九期までは農水省の助成金を受けてやってきました。昨年の第十期から再び県のみの支援を受け運営しています」。

当初はツーリズムという言葉がよく知られておらず、町や外部に浸透するのに六、七年かかったとのことでした。しかし認知されてからは、日本全国のみならず韓国からも多くの人が大学や小国町を視察するよう

になりました。卒業生は九州を中心に四国、中国、首都圏にまで及んでいます。また最近では、学生たちの入学の動機も様々だということ。

入学希望者が続々…なぜ発展し続けられるのか

「九州ツーリズム大学」の取り組みが十年を超えて継続され、ますます発展を続けている理由について、江藤さんに伺いました。

「一番大きなポイントは、事務局がしっかりしていることです。何かを始める時、軌道に乗るまでは、担当者を



財団法人 学びやの里 事務局長 小野 寿宏さん

「九州ツーリズム大学」の取り組みが十年を超えて継続され、ますます発展を続けている理由について、江藤さんに伺いました。

「九州ツーリズム大学」の取り組みが十年を超えて継続され、ますます発展を続けている理由について、江藤さんに伺いました。

「九州ツーリズム大学」の授業風景

写真上は「木魂館」での座学・写真下は直売の実習



受講生の中から町のツーリズム実践者が誕生



九州ツーリズム大学
講師 岩元 幸明さん

生徒から講師へ 同級生とは今も交流

「自宅は熊本・水前寺ですが、週に四日は小国町に来ていますよ」と笑顔で話すのは、第四期卒業生の岩元幸明さん。現在は「九州ツーリズム大学」で「うさぎ追い」の講師をしています。

「以前『うさぎ追い』の授業を受けた先生の勧めで、狩猟(毘)の免許を取って講師になりました。『うさぎ追い』は、数十人の参加者が、追っ手と押さえ手の二班に分かれ、追っ手が原野を『ちよいい。ちよいい』かけ声をかけながら竹で地面をたたき、野うさぎを追い出し、網に絡んだところを、押さえ手が押さえるという楽しいものです。そして、捕まえ

ても捕まえられなくても、事前に用意しているうさぎ汁をみんなで囲みます」と語ってくれました。

「歳をとったら田舎で暮らしたいと思って、『九州ツーリズム大学』に入りました。授業も楽しかったけれど、毎月いろいろな職業や年齢の『同級生』たちと会うのが楽しみでした。同期の卒業生は二十五名いて、今でも連絡を取り合っています。」

岩元さんは、小国にログハウス「小国ガルテン」を建て、町の行事があった際などの宿泊所としても利用されており、友人・知人と合わせて多いときで年間二百人が泊まりに来るとのことです。

「商家民泊」の第一号 金儲けより人儲け

「著名な先生の生講義が聴ける。それが魅力で大学に行っています」と話すのは、小国町で商家民泊「ササク蔵ブ」を主宰する北里香代さん。

以前から、地域の勉強会などに積極的に関わっていた北里さんは、ツーリズムの勉強を重ねるうちに、実践に結び付けないと意味がないのでは、という気持ちを抱くようになったそうです。

「うちは時計店を営んできましたが、平成十三年に『ギャラリー北里』にリニューアルしました。その時に、百年経た蔵を整理したら、昔の家具やら日用品がザクザク出てきました。そこから、古き良き時代のもを活用した民泊を考えはじめました。」

ただ、ツーリズムで民泊といえは農家民泊が主流です。商家はかかわることが難しいのではと思うときもあつたといえます。

「でも、おもてなしの心は農家も商家も同じと思ひ、蔵を寝室に改装して平成十五年から商家民泊を始めました。」

客室には昔の日用品などが飾られ、北里さんが小国の特産品で作る家庭料理はお客様

「学び」と「交流」が さらに町を元気にする

「ブランド化」が 様々な付加価値を産む

九州ツーリズム大学の「学び」を基本にした取り組みは、地域の活性化に様々な効果をもたらしました。その大きな要因の一つに「ブランド化」があると、江藤さんは語ります。「大学の活動が評価されるようになり、様々な分野の著名な先生たちも積極的に町に来てくれる。意欲的な学生も集まる。つまり人も情報もレベ

ルアップして集まってくるわけです。中には『大学で是非講義をしたい』と要望される先生もおり、大学のブランド化は着実に進展しています。」

また、それに伴う相乗効果で、町内外で「ツーリズムⅡ小国町」と認識されるほどになつてきたと江藤さんは続けます。「財団法人学びの里」では、平成十七年より他県の中学校の生徒たちが、小国町の農家に二泊三日滞在して農村の暮らしを学んでもらう『うるるん体験教育』の受け入れを始め、好評を得ています。来年も八校が来る予定になつていきます。昨年九十軒(一軒に三人ほど宿泊)の農

家が生徒を受け入れましたが、小国町民のツーリズムに対する意識の高揚があつてこそ実現したと思つています。また、町への移住者が増えてきています。」

九州ツーリズム大学の 可能性は無量大

「九州ツーリズム大学」の活動は全国的にも影響を与え、後を追う形で「北海道ツーリズム大学」「南信州めぐり大学」などが設立されています。「ツーリズムという言葉は広まっていますが、現実的に都市と農村をつなぐ手段と環境はまだ整っていません。たとえば農家民泊したいと思つても、山村の奥にどうやって行ったらいいのかわからない。そこで現在、カーナビゲーションと個々のツーリズムの情報

小国町が生んだ 近代医学の父・北里柴三郎



嘉永五年(1853年)、北里柴三郎は総庄屋の長男として北里村(現小国町北里)に生まれました。東京医学校(現東京大学医学部)を卒業後、内務省衛生局に勤務。

国の留学生として結核菌の発見者であるドイツのロベルト・コッホに師事し、そこで貴重な研究業績を次々と発表しました。とくに破傷風菌の純粋培養法の確立と血清療法の発見は前人未踏のもので、世界の医学界にその名を轟かせたのです。

帰国後も自らベスト菌を発見し、志賀潔の赤痢菌発見を指導。また伝染病研究所や私立の北里研究所を設立し、恩賜財団済生会病院、慶応義塾大学医学部、日本医師会、日本医学会などの設立に尽力しました。

町内には博士の遺品や生家の一部などが移築された北里柴三郎記念館があり、今も名譽町民として尊敬されています。

に大好評です。「夕食の後に話が弾んで、気がつくとも真夜中なんてこともよくあります。『金儲けより人儲け』で、町と都会の人とのパイプ役になればと思つています。」

有機野菜を使った レストラン営業に挑戦

「私は実家を継いで小国で農業をしましたが、中山間地農業の経営に危機感を感じていました。そこで新しい農業のあり方を知りたくて、『九州ツーリズム大学』に入りました」と、第二期卒業生の河津円幸さんは話します。

河津さんは、平成十五年にイタリアンレストラン「菜園の風」をオープンさせました。料理に使う野菜は、すべて自家製の有機栽培野菜。野菜の美味しさを知る河津さんは、野菜だけで出汁を取るイタリア料理に注目。自己流で料理の腕を磨き、農家レストランのシェフとしてこだわりを持った料理を提供し、馴染み客を増やしています。

「イタリア料理はニンジン、セロリ、タマネギと塩・胡椒で出汁を取ります。ミネラルをたっぷり含んだ野菜本来の味わいが楽しめるんですよ」



商家民泊「ササク蔵ブ」
主宰 北里 香代さん



イタリアンレストラン「菜園の風」
オーナー 河津 円幸さん

人づくりと交流で、地域の可能性を大きくふくらませてきた小国町。これからの活動に期待が高まります。



阿蘇外輪山の最高峰で936mの位置にある大観峰

電気のふるさと紀行

小国町の南に延々と連なる阿蘇の外輪山。「阿蘇はあるが、阿蘇山はない」といわれるように、約九十キロメートルにも及ぶ外輪山に囲まれた火山原全体が、阿蘇と呼ばれています。十数年前に数多くの火山が噴火し、その後大陥没がおこって現在の原形になったとか。

展望台から世界最大級のカルデラや、今も噴火口から立ち上る白煙を眺めると、いかに人間一人がちっばけなものであるかを痛感します。一人が小さな存在であるからこそ、人間は繋がり合う。助け合うという知恵を手に入れて生きてきました。この雄大な阿蘇の自然の中で、九州ツーリズム大学も人の繋がりや知恵のネットワークを活用して発展を続けています。